

「社会基盤学」が作る未来 構造家・杉本将基

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■ 建築家・内藤廣の教育

構造家の杉本将基さんの故郷は愛知県の一宮市で、1979年生まれの41歳。工作が好きな子供だったが、特に建築や土木を目指したわけでもなかった。東京大学にも「深い意味はなくて…」入学（こんなヒトいます!）。土木工学科から同大大学院工学系研究科の社会基盤学専攻を修了した。杉本さんは、覇志堂が敬愛する建築家内藤廣さんの研究室の出身で、ご最頂の構造家・山田憲明さん（本コラム34回に登場）の事務所にもいたので気に掛かる構造家なのだ。内藤廣先生の建築にも思想にも憧れ、一番好きな建築家だと語る杉本さん。「土木工学科の特異な才能の土木設計家」と覇志堂がいう篠原修教授のところにも内藤廣さんが助教授で来られたのが出会いです。景観デザインで「お茶の水駅を10分の1で考える」設計演習があり、素材から形が決まりその流れが構造につながるのが実に面白かったという。内藤先生の教育のお陰で建築構造へ目を開かされたのだった。

杉本さんは『隈研吾という身体-自らを語る』（大津若果 著、NTT出版）の書評を本誌で書いていて、建築を受動的行為であると語った隈研吾という建築家が、木材や石や和紙といったその場所にある材料を使って技術で建築をつくる方法に着目している。材料に着目しているのはフランク・ゲーリー展の展示評でも、ゲーリーの建築で興味深いのが外壁の材料だとしている。素材から形が決まりその流れから構造につながると考える、杉本さんの基本的な構造思想が出ているようです。

■ 二人の構造家

内藤廣さん設計の構造をしていた空間工学研究所の岡村仁（本コラム50回に登場）さんのところへアルバイトに行ったのは、大学院2年のとき。そこで模型番長と自負した杉本さんは、卒業してそのまま入所し



て、事務所がKAPになってからと合わせて8年を岡村さんの元で過ごす。建築家から話を引き出して、それを柔軟に受け止め構造設計をする岡村仁さんのスタイルは師匠である渡辺邦夫先生からの伝授かもしれない。そのライブ感がたまらなく面白かったし、今でも糧になっているという。実務では内藤廣建築設計事務所設計の京都の“虎屋”と、静岡県“このはなアリーナ”が印象に残る。退所してすぐ故郷の愛知での独立も視野にはあったが、違った場で構造を再勉強を選び、創立まもない山田憲明構造事務所の門を叩く。紹介者なしでのLOVEメールでのアプローチだったと聞いた覇志堂はニヤリ。山田憲明さんとは一緒に考えながら設計ができたのが勉強になったという。

■ 社会基盤学をベースに

杉本さんが、大学院で専攻した社会基盤学は人の生活と環境にかかわる多様な専門分野を総合化し支えて来た実践的学問体系、必要基盤技術・デザイン・政策決定・マネジメントなどに関する研究・開発・実践を行うことが目的の学問だ。「鉄道があって、街に広がって、それが建築構造にも」といったように違う分野に広がる社会基盤学。その流れの中で、一番興味をもった建築構造での専門性を磨いてきたのだ。今は素材という小さな点から建築構造へと興味を広げて、活動している段階だ。独立してから住宅や体育館、幼稚園などめっぽう忙しいが、今後どのスタンスで活動の場を広げていくのか興味深い。自然環境にも視界を広げていきたい思いが意識にあるというから、建築や土木を超える研究をしていくはず。目が離せない期待の構造家なのです。